

四季の^も守り人たち

社会福祉法人 白鳩会 広報誌 No.103

Seed Seed Seed

シードシードシード



〔特別イベントレポート〕

ハナノキフェス 2024

〔Seeds to Grow 種を育てる〕

中村多喜子・中村邦子

利用者さんと
共に生きる、学ぶ。



10月20日。天候にも恵まれ、昨年に引き続き『ハナノキフェス』が開催されました。今年のテーマは「凸凹こそよし」。昨年よりさらに一歩踏み込み、障がいといった凸凹を持つ人や才能を活かすことによるモノづくりや仕事のあり方を身近に感じてもらいたい。そんな想いから半年以上かけ、地域の有志などのお力も借りながら準備を進めてきました。昨年との違いとして、会場内の各ブースや地域の皆さんからそれぞれの活動を紹介する時間を設けたことが一つ。ハナノキフェスを通して、まちのモノ・コト・ヒトをもっと深く知り、繋がってほしい。そんな私たちの願いを込めたタイムテーブルにしました。他にも体験ブースを設け、利用者や来場者が一緒に五感で楽しい時間を共有し、利

用者と仲良くなれるような仕掛けも。そして、今回の目玉は俳優でもあり、捨てられる「資源」をアップサイクルするライフスタイルブランド『momiji（モミジ）』を手がける松山ケンイチさんとのコラボシャツ。ハナノキフェス限定販売ということもあり、多くの方にご購入いただきました。松山さん自ら販売スタッフとして来場者と交流し、一人一人と丁寧にお話されていたのが印象的でした。何とTシャツの真ん中には松山さんがデザインされたハートのイラストがあり、その中には白鳩会の利用者が描いたイラストたちが！まさに凸凹な人の個性を活かすモノづくりが体现されているように感じました。フェスの楽しみといえば、やはりフード。各ブースには今年も長蛇の列ができ、賑わっていました。利用者も調理補助やレジ、配膳といったカタチで参加。新商品として開発された「たき粉」の販売もあり、そちらも多くの来場者の注目を集めていました。この商品の特徴は二つ。一つ目は花の木農場でつくったオーガニック粉茶であること。二つ目はその粉茶にするために利用者が一つ一つ丁寧に石臼で挽いていること。この手間暇かけた特徴があるからこそ、の甘さと美味しさが詰まっており、人気を集めていました。ジェラートにほんの少しタキ粉をかけて食べるのがオススメのこと。ぜひ、この機会にご賞味いただけたら嬉しいです。





新連載 時のまにまに 「よっ！」という声かけで思い出した感覚

先日、10月20日に2回目となる『ハナノキフェス』が開催された。当日だけではあるが、ありがたいことに昨年に引き続き広報部隊としてお手伝いをさせてもらった。テーマも内容も進化し、多くの来場者が居心地良く楽しめる空間になっていて、仕事を忘れてウキウキしている自分がいた(笑)。そんなハナノキフェスで、これは僕でしか体感できなかったであろうことを今回お話ししたいと思います。それは「よっ！」と声をかけてくれる人たちが圧倒的に増えたことだ。それは地域や白鳩会の皆さんだけではない。毎月、顔を合わせている利用者の皆さんもそうだ。会場入りするなり、ある利用者が僕を見るなり、駆け込んできた。それはいつものことなのだが、その日はちょっと様子が違った。どうしたのだろうか？ そんな不安がよぎったのだが、話をしていると理由がわかった。それはステージに立つという大きな役割を担っていたからだ。普段、その利用者はリラックスしておちゃらけた印象があるのだが、やはり多くの大衆の前に立つことにはかなり緊張していたらしい。「なーんだ、そんなことか！ いつもとおりでいこう！」いつものように声をかけ、背中を押してステージまで見送った。その後、「あー！ 終わったー！」と何だか達成感に満ちた顔で喜んで報告してくれたのが忘れられない。その後、会場内を歩いていると、別の利用者から「お、上さん、こんにちは」「ちょっと見てよ」と手招きされ、あるブースへ案内された。それはその利用者が丹精込めて作った商品が並ぶブースだったのだ。初対面の際は、あまり目が合わず、話もそんなに膨らまな

かったのだが、それが今ではラフに接してくれるような関係性になった。好きなことだからか、僕の返しを待つことなく作った際のエピソードやアピールポイントを話してくれた。何だか子どもみたいだな…。そう思うと、つい僕までニヤけてしまった。そんなふうにハナノキフェスでは「上さん」と認識して「よっ！」といろんな人に声をかけてもらえたり、そこから踏み込んで普段見せない様子を見せてくれたり、心の声を聴かせてくれた。この感覚ってなんだろう…。学生時代の文化祭のような、そんな感覚を覚えた。その時も、気軽に声をかけてもらって、そこから普段知れないその人の一面を知れて、ちょっと得したような時間を過ごした記憶がずっと残っている。だけど、大人になってからそんな感覚を忘れていたような気がする。それは、ほんの些細なことかもしれない。生きていく上で必要ではないことかもしれない。それでも僕にとっては、いろんな人と関わる中ではとても大事なことになる。何気ない声かけが僕の居場所を与えてくれている気がしてならない。

阿久根市在住の編集者。人となりや記憶を残すお手伝いをしながら、クローズドのインタビューサービス『はもん〜 hamon 〜』を静かに展開中。最近は霧島市のコミュニティナースと“広い意味のケア”をテーマにした『Care's World』を始動し、県内各地を走り回っている。

上泰寿
かみやすとし



午後からは「凸凹こそよし。人を活かすモノづくりの醍醐味」をテーマにシンポジウムを開催。ファシリテーターにたき粉の商品開発にも関わってくださったTommyBanso Creativeの富井伸之さんを迎え、ひふみより株式会社白澤繁樹さん、松山さん、理事長の中村で話が展開されました。実は松山さん、今年の夏に一度花の木農場へ足を運んでくださり、それがきっかけでハナノキフェスへの参加を決意されたのだとか。有害駆除された害獣の肉は活用されているが、皮は廃棄されている現状を知り、momijiを立ち上げたという経緯をお話されました。ブランドを展開し「元々あるモノを活かす」を深く考えて

いく中で農福連携を知り、花の木農場へと辿り着いたそうです。白澤さんは株式会社として就労継続支援B型事業所を運営されていますが、以前はITといったクリエイティブの世界でお仕事をされていたと話がありました。ある時、福祉の現場である利用者が低賃金で働いていた姿を目の当たりにし、そこから自身の力を活かし、利用者が働きやすい環境をつくれなにかと考え、今の事業を立ち上げたといいます。登壇者3名とも共通して話にあがったのが「凸凹の面白さをまずは知ること・気づくこと」。そこから新しい何かが始まり、さまざまな凸凹を持つ人たちと出会い、共感の輪が広がっていくのではない。その輪から高い質と付加価値

値が生まれ、世界を変える原動力へと繋がっていくのではない。そんな可能性にまで話が展開されました。中村からは「今日この場で話したことが答えというわけではなく、皆さんと考え方を共有し、それぞれの明日に繋がっていったら嬉しい」といった言葉があり、シンポジウムは終了しました。フィナーレは花の木農場メンバーや地域有志で構成された「花の木ファーマーズクワイヤ」によるゴスペル。月に2回集まり、練習を重ねてきたのだとか。「世界に「一だけの花」LOVEMASHIN」「明日はまたおとずれる」「手のひらを太陽に」「オー・ハッピー・デイ」といった5曲を披露しました。後半になると、来場者も全員立ち上がり、会

場が一体となる場面も。ハナノキフェスを通して、既存の「枠」から解放されたりフレキシブルな時間になったのではないかと強い手応えを感じた瞬間でした。今年も凸凹な人たちが一体となり、昨年以上に楽しく、知る・繋がるが深まった時間のように思えましたし、障がいといった凸凹を持つ当事者を中心に置きながら、地域や来場者の皆さんと空間をつくることの可能性をさらに感じました。今後も花の木農場を舞台に誰もがフラットに交流できる空間をつくっていったらと思いますので温かい目で見守っていただけたら幸いです。

文：上泰寿
写真：島崎智成



現おおすみの園 施設長
中村邦子

前おおすみの園 園長
中村多喜子

利用者さんと 共に生きる、学ぶ。(後編)

敏感な施設であり続けること。

昨年度は、施設の建て替えや引越などで、日常生活に大きな変化が生じた。そのなかで、一番柔軟に通常どおりに生活を続けてくださったのは利用者さんだったらしい。工事による停電や断水で慌てる支援スタッフに対して、利用者さんは「あ、電気が切れたなら待とう」と、生活を続ける。「ありのままの状態を受け入れ、なにもなかったように生活を続けてくださった利用者さん。」と邦子さんが尊敬した眼差しで教えてくれた。

しかし、そのような、ありのままを受け止めることはプラスである一方、ある意味マイナスなこともあるようだ。「嫌なことでも受け入れ続けることもあり得る。〈人〉としての人生を台無しにしてしまう可能性もあるのです。障がいがあるがゆえに自分の気持ちや生きづらさを言葉で伝えることが困難な場合もあります。私たち支援する側がその生きづらさを敏感にキャッチし、利用者さんにより良い人生を過ごして頂く、そのような支援ができる施設でありたいと思っています。多様な人が、いろいろな生き方ができるように。利用者さんの喜怒哀楽を大切にできる施設づくりを常に心がけています。利用者さんと支援員が微笑み合っている様子、利用者さんの訴えを理解しようと努めている支援員の姿に、幸せを貰いま

前号に続き、白鳩会の活動の原点「おおすみの園」でお聞きする設立当初のお話。利用者さんと暮らし、人生をともにする――。
前施設長 中村多喜子さんと現施設長の中村邦子さんの笑顔と優しい眼差しに、強い覚悟があふれていた。

Seeds to Grow
Staff Interview 種を育てる



「色々な人がいていい」 という地域の理解がある。

家族の中に利用者さんがいて、一緒に食事の準備をし、年始年末を過ごすこともあったという中村家。日常の中に今の白鳩会の活動の形があった。多喜子さんの思い出は時代と地域をよく表している。「子どもが地域で食べ物を盗んで食べてしまった」と聞いて姑がその子に『どうしてそんなことをするのか?』と尋ねてみると『お腹が空いていた』と。そこで『子どもはお腹が空いたら、お腹いっぱい食べ物を食べさせてあげるのが大人の役目』と食事を提供しました。昔はそんな空気が地域にあり、困っている人には手を差し伸べるものでした。」と。地域に必ず、障がいを持っている人が当然いて、家庭でも学校で「当たり前」にみんなが優しくする」と言われてきたそう。

そのような環境から白鳩会の活動の姿はできてきた。「50年間、この地で障がい者支援に携わってきてわかったのは、〈地域に理解がないと継続は難しい〉ということ。障がいがあるがゆえに誤解をされたり、障がいを知らないがゆえにどうしたらいいのかわからないという人もいるとお聞きます。この地域では、色々な人がいていい、と思うひとがいます。わたしたち白鳩会の利用者さんは日常的に、地域にお買い物や散歩に出かけ

か?』を知ろうとする〈心のつながり〉は、人間同士でないとできない分野だと思っています。それを育て、利用者さんの思いに〈敏感な施設〉でありたいと思います。大きなことができなくても、日々の生活の中で利用者さんと心のコミュニケーションをひろげ、利用者さんが思いのままの表現で毎日を楽しんで暮らしていただければ嬉しいです。過疎地だからできる支援、地域を含めたあたたかさを大事に〈ほっとする場〉へ家に帰ってきた安心感を感じられる施設として利用者さん、支援スタッフと共に築いていきたいです。」

長い時間を利用者さんと過ごす邦子さんにも、時には、最期に立ち会うこともあるという。「そのような時は『本当にここで暮らして幸せだったのかな』と常に考えさせられます」と邦子さん。
『それぞれの利用者さんの人生があって、その大半をこの施設で過ごされる』と思うと、非常に責任を重く感じます。単なる制度に乗るだけではなく、利用者さんには『ここにいてよかった』と思ってもらえる、職員も『その方の人生に寄り添えて良かった』と思えるような環境を作りたい。終末に立ち会った際に、『たくさんの方のことを教えてくださったってありがとう』と感じるのです。」

られます。それは当たり前前の、日常。それを地域の方々があたたく見守って下さることに感謝しています。ときには地域の方から「いま〇〇さんがここにいてお茶を飲んでますのでお知らせしておきますね」と連絡をくださることもあり、彼らを見守って、自然に受け入れてくださる――、これが南大隅町の地域性ですね。」と語る。白鳩会は、昔から運動会やバザーなど様々な行事を地域の方々の協力を頂きながら実施してきた。その積み重ねが地域の方々との信頼関係を築いているようだ。





生活介護では、外部から講師をお招きして、音楽レクリエーションの活動に取り組んで 14 年になります。近年では「積み木」も加わりました。みんなで協力して大きく積み上げたり、小さなグループや個人で思うままに積み上げていきます。



丸く積み上げたり、ジグザグに積み上げたり。テーマも「ジャングル」や「高層マンション」など様々です。最後は天井に着きそうなくらい高く積んだ利用者さんもいらっしゃいました。



完成した積み木は、みんなで鑑賞した後に一気に崩します。木のぶつかり合う気持ちの良い音と共に、崩れたあとは自然に拍手が沸き上がるのでした。

活動はというと、基本的には「自由に好きなように過ごしていいよ。」と、それぞれの選択を尊重しながら進行しています。カホンのリズムがぐちゃぐちゃに乱れていてもそのままでもいいし、積み木で特に何かを作ることを指示することはありません。回を重ねることで、少しずつ何かを掴み、良い変化に繋がることを願っています。活動を通じて、これ好きだな。嫌いだな。面白いな。楽しいな。をそれぞれに見つけてもらえたら嬉しいです。今後は私の面白いと思う世界を見て欲しいし、枠組みを決めずいろいろな活動してみたいと思っています。何か工作をしたり、天体望遠鏡で月を見たり。これからの活動を通じて共感したり共有できたらと思っています。

はじめまして。浜崎と申します。カホンという打楽器と積み木を使ったレクリエーションを交互に実施していますが、この活動の最も重要な点は、私自身が直接訪問し利用者さんと顔を合わせてコミュニケーションを取ることにありと考えています。カホンや積み木は、私と利用者さんを繋ぐツールに過ぎません。「今日のお昼は何食べた?」「日曜日は何をしていた?」「こんな面白いことがあったよ。」という具合に。とはいえ、おしゃべりばかりしているわけでもなく(笑)



打楽器工房 HM CAJON 代表
浜崎有章さん

今回は、花の木カノンで実施している音楽レクリエーションの講師「打楽器工房 HM CAJON 代表 浜崎有章さん」に寄稿していただきました。

社会福祉法人 白鳩会

おすすめエリア

【おすすめの間】

893-2501 鹿児島県肝属郡南大隅町根占川北 2105
TEL : 0994-24-2517 / FAX : 0994-24-3711

【花の木ファーム】

893-2501 鹿児島県肝属郡南大隅町根占川北 9466-8
TEL : 0994-27-4737 / FAX : 0994-27-4744

【第2花の木ファーム】

893-2501 鹿児島県肝属郡南大隅町根占川北 9445-2
TEL : 0994-28-1011 / FAX : 0994-28-1021

【グループホーム】

グループホームおすすめ(全6棟)
ケアホームねじめ(全4棟) / ケアホーム花の木(全3棟)

【白鳩会障がい者相談支援センター】

893-0006 鹿児島県鹿屋市向江町 20-18
TEL : 0994-40-9511 / FAX : 0994-40-9525

【Shop(ショップ)】

お食事処花の木(南大隅町) TEL : 0994-24-4114
Café terrace HANANOKI TEL : 0994-25-1088
アンテナショップほほえみ(南大隅町) TEL : 0994-24-2517
Beehive おすすめ(鹿屋市) TEL : 0994-40-9511

かごしまエリア

【花の木カノン】

890-0067 鹿児島県鹿児島市真砂本町 56-11-2F
TEL : 099-255-1330 / FAX : 099-210-5742

【放課後等デイサービス 花の木カノン】

890-0067 鹿児島県鹿児島市真砂本町 56-12-2F
TEL : 099-255-1330 / FAX : 099-210-5742

【相談支援事業所 花の木】

890-0067 鹿児島県鹿児島市真砂本町 56-1-1 階
TEL : 099-210-5741 / FAX : 099-210-5743

【花の木デイズ】

890-0072 鹿児島県鹿児島市新栄町 32-7
TEL : 099-250-0832 / FAX : 099-250-0454

【グループホーム】

グループホーム 鴨池(全3棟)

【Shop(ショップ)】

FARMERS TABLE HANANOKI TEL : 090-7536-4317

発行元：社会福祉法人 白鳩会
www.hananokifarm.jp

